

# 若者のミリューと政治的好感度

ーポピュリズム、市民運動、東アジアー

松谷 満

桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部

(2009 年 3 月 7 日 受理)

## 1. 問題

近年、若者の政治行動や政治意識に注目が集まっている。「劇場型選挙」として強い印象を残した 2005 年総選挙では、若者の投票行動がその結果に少なからぬ影響を与えたといわれる<sup>(1)</sup>。また、若者文化や流行現象のなかに新たなナショナリズムの萌芽を指摘する議論もみられる<sup>(2)</sup>。その一方、「反戦」「反貧困」など多様なテーマを掲げる市民運動も若者を中心に一部で活発化している<sup>(3)</sup>。このように多様な現象が「若者」という属性のもと一括りに語られている現状がある。

しかし、そこには 2 つの疑問が生じる。第 1 に、事実認定をめぐる問題である。2005 年総選挙において「不利益をこうむるはずの若者がポピュリズムを支持した」という事実はあるのか、若者は全体として右傾化しているのか、といった点については、実証的には明確な結論が得られていない。前者については、若年低所得層がとりわけ自民党に投票したという調査結果は確認できていない<sup>(4)</sup>。後者についても、質問項目によっては、むしろ若年層において愛国心が低下しているとの調査結果もある<sup>(5)</sup>。

第 2 に、若者の多様性をめぐる問題である。

仮に、先の諸現象が若者において確認されたとしても、それらを担っているのは均質な「若者」集団ではない。当然のことながら、それぞれの現象はまったく別の若者によって支持されている可能性もあるし、同じ若者が複数ののかわりをもつ可能性もある。

現状では、こうした点をふまえた実証研究が十分になされているとはいえない。したがって、個別の見聞や思い込みが若者全体に敷衍され、あたかも若者が均質で（多くの場合）批判されるべき存在であるかのような議論がまかり通っている<sup>(6)</sup>。

実証的な調査研究が進めば、事実認定についてはより適切な議論がなされるようになるだろう。しかし、多様性への配慮については困難な問題が残る。それは「個人化」と称される社会の変化と結びついている。社会学では、世代、学歴、職業、階層といった社会的属性が人びとの意識や行動を規定するという前提のもと、調査研究が積み重ねられてきた。しかし、「ゆたかな社会」の到来、都市化、高学歴化、情報化といった社会の変化によって、社会構造的な拘束は著しく弱まった。すなわち属性的地位によらず自らの人生は個人が選択する（せざるをえない）という「個人化」状況が現出したのである<sup>(7)</sup>。

たとえば、日本政治における重要な対立軸

であった「保守－革新」は、「伝統－近代」という世代間の価値対立、「自前層－非自前層」という職業的利害の相違、学歴差による価値観の相違などの延長線上にとらえることができた。しかし、脱産業化期以降は、そうした単純な対立軸を想定することは困難となっている。このように現代社会を分析するにあたっては人びとの多様性をどのようにとらえるのかという問題が浮上しているのである。

本稿では、その問題の解決にむけてミリユー・アプローチの可能性を検討したい。ミリユー・アプローチはもともと1980年代のドイツでマーケティングの手法として確立され、他分野に応用されるようになった。日本やアメリカでもライフスタイル・アプローチとして同様の手法を用いた研究がみられる<sup>(8)</sup>。

ミリユー・アプローチでは、階層や世代といった客観的条件ではなく、ライフスタイルやメンタリティといった主観的条件にもとづいた潜在的な文化集団を「ミリユー」として位置づけ、それによって人びとの意識や行動を記述・説明するという手法がとられる。これは先に指摘したような社会の変化にともなう客観的条件の説明力の低下、ライフコースの多様化といったことが着想の源泉となっている。

ミリユー・アプローチの利点は、客観的条件ではとらえきれない文化集団を導き出し、個々の集団の多様な論理を描き出すことで、直感的理解や新たな問題の発見に資することにある。本稿では、このミリユー・アプローチによって多様な若者集団を析出し、その政治的多様性を検討したい<sup>(9)</sup>。

本稿では、具体的なテーマとして若者の政治的好感度を取り上げる。政治的好感度とは、政党や政治家、組織、国といった政治的なものごとに関連する対象への好悪の感情を意味する。とくに本稿ではポピュリズム、東アジア諸国、市民運動といった近年、「若者と政治」にかかわるトピックとして取り上げられることの多い対象について検討する。

ポピュリズムについては、すでに既出論文でミリユーとの関連を実証的に検討している。そこでは、社会的属性とポピュリズム支持とのあいだには明確な関連がないこと、地位や収入といった「物質的」目標を重視し、消費や社交への積極性がみられる「セレブ系」ミリユーが親ポピュリズム層の中核をなすこと、逆に、非社会的で「物質的」目標を重視せず、マンガやゲームへの関心が高い「オタク系」ミリユーが反ポピュリズム的であることが明らかとなった。同時に、ミリユーの政治意識が価値観を媒介したものではなく、生活感覚や美学的要素によって規定されている可能性があることも示唆された<sup>(10)</sup>。

しかし、上記の知見には再検討の余地がある。それは、特定の対象についての好感度は、それ以外の対象についての好感度との比較において評価されねばならないという点である。たとえば、ポピュリズムと東アジア諸国の双方について好感度が高いというパターンと、ポピュリズムについては高いが東アジア諸国については低いというパターンとでは明確な違いがあり、それらを同一の類型としてとらえるのは適切ではない。逆に、反ポピュリズム的な者が、東アジア諸国にも市民運動にも否定的な感情をもつということも可能性として想定しうるのである。

こうした点をふまえ、本稿では特定の対象についての好感度を独立のものとしてとらえるのではなく、さまざまな対象についての好感度のパターンを類型化し、それがミリユーによってどのように説明されるのか、ということ进行を明らかにしてみたい。

使用するデータは2007年5月に東京都8区市で実施した質問紙調査（以下、東京調査）から得られたものである。郵送法で得られた有効票は1663票である（有効回収率34.7%）<sup>(11)</sup>。調査対象年齢は20～69歳だが、本稿では20～39歳の若年サンプル（586）を用いる。

まず、2節では目的変数として使用する政治的好感度について説明し、その類型化を

試みる。そのうえで政治的好感度が社会的属性によっては十分に説明しえないことを確認する。次に、3節では本稿で使用するミリューについて簡単な説明を行うとともに、ミリューと政治的好感度との関連を分析することになる。

## 2. 政治的好感度

政治的好感度を測定するものとして本稿では感情温度計を用いる。感情温度計とは、好意（100点）－反感（0点）の程度をたずねるものであり、50点が中立的な評価となる。東京調査では、政党・組織など14の対象について好感度をたずねた。本稿で用いるのは、石原慎太郎東京都知事、小泉純一郎元首相、市民運動、中国、韓国である<sup>(12)</sup>。石原と小泉については既出論文と同様にポピュリズムを測定する指標として用いる。図1に好感度の分布を示した。50点を超える場合は「好き」、50点に満たない場合は「嫌い」とカテゴライズしている。

石原および小泉については「好き」の割合がかなり高い。市民運動については「どちらでもない」という評価が多く、中国、韓国については「嫌い」の割合が高くなっている。

図1は若年層のみの結果を示したものであるが、全世代との比較においては、石原および市民運動について「嫌い」の割合がやや高く、韓国について「好き」の割合が高いことがわかった。

次に、これら5つの指標をもとに政治的好感度の類型化を行った。石原と小泉、中国と韓国については高い相関が確認されたため主成分分析により合成得点を作成し、ポピュリズム、市民運動、東アジアという3変数で非階層的クラスター分析を行った。よりシンプルな結論を導き出すために、クラスター数は3に定めた。この手続きにより構成された3類型ごとの好感度（平均値）を表1に示している。

類型Ⅰは、すべての対象について好感度が平均値を上回っている。相対的には、どの対象にも否定的な感情をあまりいだかないタイプであると推測される。ただし、石原、小泉に対する好感度がかなり高く、ポピュリズムに共感しやすい層であるともいえる。

類型Ⅱは、市民運動に対する好感度がもっとも高く、中国、韓国に対する好感度も他を上回っている。その一方で、石原、小泉に対する好感度はきわめて低い。ポピュリズムよりは市民運動に共感をおぼえ、近隣諸国に対

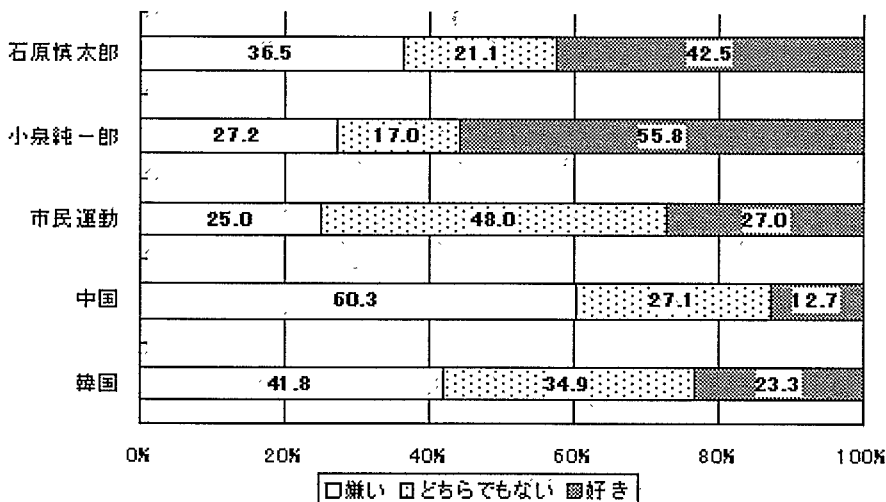


図1 好感度の分布

表 1 類型ごとの好感度

	石原慎太郎	小泉純一郎	市民運動	中国	韓国	N
I	63.2	71.0	54.2	35.6	45.6	303
II	23.9	32.8	55.8	39.9	48.4	180
III	46.6	52.8	19.5	11.7	16.5	97
全体	48.2	56.1	48.9	32.9	41.6	580

しても寛容な層であるといえる。

類型Ⅲは、類型Ⅰとは逆にすべての対象について好感度が平均値を下回っている。石原、小泉に対する好感度は平均とほぼ変わらないが、市民運動そして中国、韓国に対する好感度が著しく低い。

このようにそれぞれ特徴のある3類型が導き出されたわけだが、各類型には何らかの属性的特徴がみいだせるのであろうか。性別、学歴、職業、雇用形態、所得、階層帰属意識とのクロス集計表によって確認したところ、統計的に有意な組み合わせをみいだすことはできなかった<sup>(13)</sup>。では、客観的条件ではなく、主観的条件から政治的好感度の分岐をとらえることは可能だろうか。次節で検討したい。

### 3. ミリューと政治的好感度

#### 3.1 若者のミリュー

本稿ではミリューを社会的属性の影響を受けつつも、それとは相対的に独立したライフスタイルやメンタリティの共通性と定義する。本稿で使用するミリューは既出論文と同じものを用いるため、手続きの概略のみを説明するにとどめたい。

まず、できるだけ若者の多様性をとらえるようなライフスタイルやメンタリティに関連する項目を選定し、因子分析によって潜在因子を抽出した。具体的には6つの生活意識因子（個性志向、地位志向、快楽志向、非社交性、消費志向、経済不安）、5つの生活行

表2 生活意識の因子分析

	個性志向	地位志向	快楽志向	非社交性	消費志向	経済不安
自分らしさを貫く	.93	-.03	-.01	.02	-.06	-.04
ありのままの自分である	.67	-.06	.05	-.04	.03	-.06
個性な生き方をする	.57	.10	.00	.07	.02	.09
高い地位を得る	.00	.69	-.12	.00	-.05	-.04
高い収入を得る	-.04	.66	.05	-.01	.01	.05
他人よりも豊かな暮らしをする	.05	.65	.11	.00	.02	-.02
できれば遊んで暮らしたい	.03	-.04	.88	-.06	.00	.01
楽しいことしかしたくない	.00	.05	.70	.07	.01	.01
一人である方が落ち着く	.07	.04	-.05	.79	.08	.00
自分は社交的だ	.12	.17	-.08	-.48	.10	.05
休日でも家にいる	.04	.03	.01	.43	-.04	.06
ライフスタイルにこだわった消費	.09	-.09	-.08	.00	.68	.07
買いたい物が好き	-.02	-.04	.08	-.07	.60	-.02
ブランドにこだわった消費	-.10	.14	.03	.09	.49	-.10
経済的に安定している	.00	.00	.05	.04	.02	-.68
自分や家族に失業の不安がある	-.02	-.01	.08	.08	.00	.57
回転後の負荷量平方和	1.77	1.71	1.48	1.39	1.34	0.95

注：主因子法（プロマックス回転）。初期固有値1以上。因子負荷量4.0以上を網掛け表示。

表3 生活行動の因子分析

	テレビ	文化系	オタク	スポーツ	ネット
バラエティ番組を観る	.76	-.02	.02	.00	.04
クイズ番組を観る	.60	.00	.13	.09	.03
テレビドラマを観る	.53	.13	-.12	-.03	-.08
ワイドショーを観る	.47	-.06	.03	-.09	.03
コンサート・美術展に行く	.03	.75	-.05	-.08	-.03
映画・ライブに行く	.14	.55	-.06	.16	.05
読書をする	-.10	.49	.15	.05	-.05
芸術活動をする	.00	.48	.00	-.12	.09
漫画を読む	-.09	.21	.68	.00	-.05
テレビゲームをする	.00	-.12	.51	.08	.18
テレビアニメを観る	.14	-.06	.50	-.10	-.09
スポーツ番組を観る	.10	-.08	.01	.66	-.11
スポーツをする・観戦する	-.14	.05	-.04	.57	.08
ネットでコミュニケーション	.03	-.03	.05	-.06	.72
ネットで情報収集をする	-.02	.18	-.06	.07	.45
回転後の負荷量平方和	1.68	1.69	1.17	0.98	1.15

注：主因子法（プロマックス回転）。初期固有値1以上。因子負荷量4.0以上を網掛け表示。

動因子（テレビ、文化系、オタク、スポーツ、インターネット）が抽出された（表2、表3）。次に、抽出された因子の得点を用いて非階層的クラスター分析を行った。7クラスターがもっとも有意な解釈が可能な類型とみとめられ、それらをミリユーとみなすことにした。

分析から導き出された7つのミリユーの特徴は表4のとおりである。なお、名称は各ミリユーの社会的属性および生活意識・行動における特徴を加味し付与されたものである。

各ミリユーの価値意識とポピュリズムに対する好感度については既出論文に示したが、おおよそ次のような特徴がみられる。「エリート」は競争的な市場社会を肯定する意識が目立って強い一方、文化的側面においては保守的である。「オタク系」「文化系」は同性愛や夫婦別姓などを容認する意識が強く、文化的側面において寛容である。逆に、無趣味人は寛容性が低い。それ以外のミリユーは、ほぼこの世代の平均的な価値意識を有している。

ポピュリズムについては、先述のように「セレブ系」がポピュリズムに対する好感度が高く、「オタク系」が逆に低かった。既出論文では「セレブ系」の生活感覚が小泉や石原のマスメディアを介して伝えられる「人物像」

と強く共振する部分があるのではないかと、「オタク系」にとって、とりわけ石原のようなポピュリスト的政治家は文化的な多様性、個人的な趣味の領域に干渉するような迷惑な存在としてとらえられているのではないかと、この解釈を示した。

また、「オタク系」とほぼ同様の価値意識をもつ「文化系」がポピュリズムに対する好感度が意外に高く、主婦層の占める割合が高い「平凡系」がポピュリズムに対して相対的に否定的な感情をもっているなどの結果も得られている。

### 3.2 ミリユーと政治的好感度

では、若者のミリユーと先に示した政治的好感度の類型との関連はどのようになっているのだろうか。ポピュリズムのみを検討した際にはとらえきれなかった知見が得られるのだろうか。表5に、クロス集計の結果を示した。社会的属性とは異なり5%水準ながら有意な関連があることがわかった。ただし、サンプル数の少ないミリユーについては、関連の信頼性について、より慎重な検討が必要であろう。

まず、類型Ⅰはすべての対象について肯定

表4 各ミリュウの特徴

名称	特徴
オタク系	きわだって非社会的。非正規雇用が多く、経済的な不安を抱えている。地位や消費への関心はもっとも低い。一方でマンガ、アニメ、ゲームへの関心は高く、ネット利用も相対的に多い。世間に流布する「オタク」イメージにもっとも近似するミリュウといえる。
セレブ系	女性比率が高い。消費への関心が高く、自分らしさを重視する。もっとも社会的。一方で、文化全般に対する関心が低い。本人の収入はそれほどでもないが、世帯収入はもっとも高い。経済的な安定を所与とみなし、消費による自己実現を図るという点で、これも世間に流布する「セレブ」イメージに近似するミリュウといえる。
エリート	高学歴男性が多く、収入も高い。当然ながら経済的な不安とは無縁である。社交的な一方で、テレビはほとんど観ないし、スポーツに対する関心ももっとも低い。非快楽的で地位や収入を重視するという点で、仕事熱心なエリート・サラリーマンを想像させる。
無趣味人	大卒比率がもっとも低い。「オタク系」ほどではないが、非社会的で消費への関心も低い。また、自分らしさをもっとも重視していない。テレビを多少観る以外にはとりたてて趣味はなく、文化全般に対する関心が低い。もっとも活動性の低いミリュウである。
平凡系	女性比率が高く、未婚率ももっとも低い。すなわち、主婦の占める割合がもっとも高いミリュウである。快楽志向がもっとも低く、なおかつ消費への関心も相対的に低いというように堅実な生き方をしている。行動面ではテレビをよく観るということ以外には目立った特徴はみられない。
快楽系	男性比率が高く、比較的學生が多い。地位や収入は重要だが、できれば遊んで暮らしたいという意識が強い。テレビもよく観るし、スポーツもオタク系文化も好きだし、ネットもよく利用するが、読書・芸術方面への関心はそれほどでもない。
文化系	女性比率が高いが、大卒比率も「エリート」に次いで高い。「セレブ系」と同様に自分らしさを重視し、消費への関心も高いが、経済的にはやや不安を抱えている。読書・芸術方面への関心が際立って高く、ネットもよく利用する。一方、テレビはあまり観ない。

的で、ポピュリズムに対する好感度も高い層であるが、「セレブ系」が66.7%ともっともその割合が高い。ついで「文化系」が59.7%と全体よりもやや高い割合を示している。先の論文ではこの2つのミリュウをポピュリズムに肯定的な層とみなしていたわけだが、市民運動や東アジア諸国に対しても同様に肯定的な感情が強いようである。

次に、類型Ⅱはポピュリズムに否定的、市民運動や東アジア諸国に対して肯定的な層であるが、「オタク系」が45.3%ともっとも高い割合を示した。ついで「平凡系」が35.7%と全体よりもやや高い割合となっている。先の論文ではこの2つのミリュウをポピュリズムに否定的な層とみなしたが、その一方で市民運動や東アジア諸国に対しては肯定的な感

情が強いということがわかった。

最後に、類型Ⅲは市民運動や東アジア諸国に対する好感度が著しく低い層であるが、「無趣味人」が24.4%ともっともその割合が高い。ついで、「オタク系」「エリート」もそれぞれ2割程度がこの類型に含まれていた。ポピュリズムのみを分析対象としていた場合には明らかでなかったが、「無趣味人」はもっとも排外的な傾向が強い層と考えられる。また、「オタク系」のなかには類型Ⅱだけでなく、類型Ⅲというまったく異なる層も若干多く含まれていることも明らかとなった。

以上のように、ミリュウ・アプローチにより、社会的属性ではとらえきれなかった政治的好感度の分岐を部分的にはあるが明らかにすることができた。では、その関連につい

表5 ミリュウと政治的好感度

		I	II	III	計
オタク系	N	18	24	11	53
	%	34.0	<u>45.3</u>	20.8	100.0
	調整残差	-2.8	2.4	0.8	
セレブ系	N	76	24	14	114
	%	<u>66.7</u>	21.1	12.3	100.0
	調整残差	3.4	-2.5	-1.4	
エリート	N	21	14	9	44
	%	47.7	31.8	20.5	100.0
	調整残差	-0.7	0.2	0.7	
無趣味人	N	42	26	22	90
	%	46.7	28.9	<u>24.4</u>	100.0
	調整残差	-1.2	-0.4	2.1	
平凡系	N	51	35	12	98
	%	52.0	35.7	12.2	100.0
	調整残差	-0.1	1.2	-1.3	
快楽系	N	54	35	19	108
	%	50.0	32.4	17.6	100.0
	調整残差	-0.6	0.4	0.3	
文化系	N	37	17	8	62
	%	59.7	27.4	12.9	100.0
	調整残差	1.2	-0.6	-0.8	
計	N	299	175	95	569
	%	52.5	30.8	16.7	100.0

$p < .05$  Cramer's  $V = .15$

ていかなる解釈をなしうるのか、現実の政治に対していかなる示唆を与えるのか、次節で若干の考察を行いたい。

#### 4. 議論

本稿では、ミリュウ・アプローチにより若者の政治的好感度について分析を行った。先の論文で、ポピュリズムに対する好感度に限定した分析を試みたが、他の対象に対する好感度も含めた分析で、さらに新たな知見を導き出すことができるかが本稿の主眼であった。

まず、ポピュリズム、市民運動、東アジア諸国という「若者と政治」に関連して近年議論になることの多い諸対象について類型化を試みた。その結果、ポピュリズムにきわめて肯定的であるが同時に他の対象についても好感度が高い層（類型Ⅰ）、ポピュリズムに否定的で市民運動、東アジア諸国に対しては好

感度が高い層（類型Ⅱ）、市民運動、東アジア諸国に対する好感度が著しく低い層（類型Ⅲ）という3つのパターンに類型化された。

次に、先の論文で析出した7つのミリュウと政治的好感度の3類型との関連をみたところ、社会的属性とは異なり有意な関連をみいだすことができた。類型Ⅰの割合が高いのは「セレブ系」「文化系」、類型Ⅱの割合が高いのは「オタク系」「平凡系」、そして類型Ⅲの割合が高いのは「無趣味人」「オタク系」「エリート」であることが明らかになった。ただし、「オタク系」「エリート」についてはサンプル数が少なく、今回の分析結果のみでは明確な傾向として議論することは避けたほうがよいだろう。

では、これらの関連をライフスタイル・メンタリティの共通性という観点からどのように解釈することが可能だろうか。まず、「セレブ系」「文化系」に共通する要素は現今の消費社会を享受しているという点、「自分ら

しさ」を重視するという点である。前者の特徴が社会全般に対する肯定的な感情をはぐくむ素地となっている可能性がある。また、ポピュリズムに対する好感度の強さは、「自分らしさ」「個性」を体現する存在への共感にその一端を求めることができるかもしれない。

「無趣味人」の特徴は、文化全般に対する関心の低さ、活動性の低さである。また、価値意識における寛容性の低さも特徴としてあげられる。日常生活における消極性と価値意識における寛容性の低さが共変関係にあり、そうした特徴が社会全般に対して否定的もしくはシニカルな態度を帰結するという経路の存在が今回の分析から確認されたといえよう。

「オタク系」は物質的な関心が低い、非社会的であるという点に「無趣味人」と共通の特徴がうかがえる。両者の違いは、文化に対する関心の強さにあるが、この文化に対するこだわりが近隣諸国に対する寛容や一般市民の運動への共感へと結びついている。しかし、一方で、社会において孤立しがちな存在であることが、否定的な感情を喚起するという経路もありうるという示唆が得られた。世間の認知として「ネット右翼」≡「ネットオタク」という短絡がみられるが、そうした傾向とは異なる極が「オタク系」に存在するというもののほうが本稿の知見としては重要であろう。

以上のように、ライフスタイル・メンタリティの共通性という観点から解釈を行ったわけであるが、上記の解釈はありうる可能性のごく一部でしかない。今後の調査研究によってその妥当性を検討していく必要がある。

最後に、本稿の分析が現実の政治に対していかなる示唆を与えるのか、ということ述べたい。今回の分析で示した3つの好感度類型のうち、明確な対比をなすのは類型Ⅱと類型Ⅲである。欧米先進諸国との対比でいえば、類型Ⅱは左派的なニュー・ポリティクス、類型Ⅲは右派的かつ排外的なニュー・ライ

トと共振しうる感情のパターンといえる<sup>(14)</sup>。しかし、それらの中核的な担い手は日本においてはどちらかといえば社会から距離をとりがちな人びとである。そのことが、日本において左右の新しい政治が萌芽的にとどまる一因となっているのかもしれない。西欧の右派ポピュリストの文脈において、日本におけるポピュリズムの浸透を危惧する議論も一部にみられる<sup>(15)</sup>。しかし、少なくとも現状においてポピュリスト的政治家を強く支持しているのは、排外的傾向の弱い人びとであり、西欧社会におけるような極右の台頭とは別の文脈でとらえる必要がある。ただし、社会状況の変化によって、類型Ⅲに位置する人びとが社会に対して行動を起こす可能性もないとはいえないのであるが。

ミリュー・アプローチにもとづく研究は端緒についたばかりだが、世代内の多様性を考慮した同様の調査研究はもっと展開されてしかなるべきだろう。そうした研究の発展が、実態とかけ離れた画一的なイメージの流布や過度の一般化を抑止し、より実態に即した展望を描く一助となるのではないか。

#### (付記)

本稿は科学研究費補助金による研究成果である。調査は伊藤美登里、久保田滋、高木竜輔、田辺俊介、仁平典宏、樋口直人、丸山真央、村瀬博志、矢部拓也の各氏との共同研究プロジェクトによって実施された。調査に際して御回答いただいたすべての方に深く感謝申し上げたい。

#### (註)

- (1) 「自民寄りくっきり 20代のココロ」(東京新聞 2005年9月13日)。「論壇時評 政治のバブル」(朝日新聞 2005年9月28日)。
- (2) 香山リカ『おちなショナリズム症候群——若者たちのニッポン主義』中央公論新社、2002。近藤瑠漫・谷崎晃編『ネット右翼とサブカル民主主義』三一書房、2007。高原基彰「不



- 安型ナショナリズムの時代』洋泉社、2006。
- (3) 丸楠恭一・坂田顕一・山下利恵子『若者たちの“政治革命”——組織からネットワークへ』中央公論新社、2004。二木信・松本哉編『素人の乱』河出書房新社、2008。宇都宮健児・湯浅誠編『反貧困の学校——貧困をどう伝えるか、どう学ぶか』明石書店、2008。
- (4) 小泉政権において低所得層の自民党支持率が伸びているという分析結果はある（安野智子「政党支持と政党評価の規定要因」谷岡一郎・仁田道夫・岩井紀子編『日本人の意識と行動——日本版総合的社会調査 JGSS による分析』東京大学出版会、2008 年）。しかし、それは若年層に限定されるものではない。
- (5) 本田由紀『軋む社会』双風舎、2008。
- (6) 後藤和智『「若者論」を疑え！』宝島社、2008。
- (7) 「個人化」については次の文献を参照された（Bauman, Z., *The Individualized Society*, Polity Press, 2001.（＝澤井敦・菅野博史・鈴木智之訳『個人化社会』青弓社、2008）。Beck, U., *Risikogesellschaft: Auf dem Weg in eine andere Moderne*, Suhrkamp Verlag, 1986.（＝東廉・伊藤美登里訳『危険社会——新しい近代への道』法政大学出版局、1998））。
- (8) 鮑戸弘・松田善幸編『「ゆとり」時代のライフスタイル——7タイプにみる生活意識と行動』日本経済新聞社、1989。川上和久・オフェル・フェルドマン「ライフスタイルと政治意識——日本における大学生調査」『社会心理学研究』4 卷 1 号、1989。
- (9) ミリュー研究に言及した国内文献として次のものがある（高橋秀寿「ドイツ『新右翼』の構造と『政治の美学』」山口定・高橋進編『ヨーロッパ新右翼』朝日新聞社、1998）。筆者らのミリュー研究には次のものがある（松谷満・伊藤美登里・久保田滋・樋口直人・矢部拓也・高木竜輔・丸山真央「東京の社会的ミリューと政治——2005 年東京調査の予備的分析」『徳島大学社会科学研究所』20 号、2007。樋口直人・伊藤美登里・田辺俊介・松谷満「アクティビズムの遺産はなぜ相続されないのか——日本における新しい社会運動の担い手をめぐって」『アジア太平洋レビュー』5 号、2008）。
- (10) 松谷満「若者におけるポピュリズムの支持基盤——ミリュー・アプローチによる実証的検討」『茨城大学地域総合研究所年報』42 号、2009。
- (11) 調査概要については次の文献を参照された（丸山真央・松谷満・久保田滋・伊藤美登里・矢部拓也・高木竜輔・田辺俊介「日本型ポピュリズムの論理と心情——2007 年東京都知事選における有権者の投票行動の分析」『茨城大学地域総合研究所年報』41 号、2008）。
- (12) 政治家の感情温度はむしろ投票行動の説明変数として用いられることが多い（池田謙一『政治のリアリティと社会心理——平成小泉政治のダイナミックス』木鐸社、2007）。諸外国に対する好感度の研究にも一定の蓄積がある（田辺俊介『「日本人」の外国好感度とその構造の実証的検討』『社会学評論』59 巻 2 号、2008）。
- (13) ただし、個別の項目について関連をみたところ、無職者が相対的に中国・韓国に対して否定的な感情をもつことがわかった。これについては、別の機会に検討したい。
- (14) Kitschelt, H., *The Radical Right in Western Europe: A Comparative Analysis*, University of Michigan Press, 1995.
- (15) 進藤兵「権威主義的ポピュリズムとその基盤」『ポリティーク』4 号、2002。